

グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）	カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）
有法子 ～困難に打ち勝つための3つの力～ を育てます。 ○自分を信じて、粘り強く前に進む力 ○課題を発見し、科学的に思考し解決していく力 ○他者と協働し、新しい価値を創る力	総合力を身に付けた「マルチリーダー」を育てます。 ○学校独自の探究科目を学び、科学的思考力・判断力・表現力を養います。 ○課題研究に取り組むことにより、自ら探究する力や他者と協働する力を身に付けます。 ○「オンライン英会話」の授業で、国際人としてのコミュニケーション力を高めます。 ○国内外の科学の最先端に触れる機会を充実させ、本物に触れる機会を増やします。 ○地元企業や市役所と連携し、地域課題を発見解決する力を育成します。 ○地域社会に必要とされる人間力や新しい大学入試に対応する学力を鍛えます。 ○国際理解教育や国際交流を推進し、英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行い、共感力・合意形成力を養います。[国際文理科(国際科)] ○大学や企業と連携したより専門的で深い理数教育を行い、探究力を養います。[国際文理科(理数科)] ○商業の知識や技能を身に付け、ビジネスの視点を持ち、地域に貢献できる人材を育成します。[商業科]

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
グラデュエーション・ポリシー	1 グラデュエーション・ポリシーの達成	グラデュエーション・ポリシーに沿って生徒が成長していると感じる教職員の割合7割以上	A	「グラデュエーション・ポリシーに沿って生徒が成長していると思いますか」という質問に対して、93%の教職員が「十分に成長している」「成長している」と回答した。残りの7%は「どちらとも言えない」であり、「あまり成長していない」「成長していない」という回答は見られなかった。	引き続き、全校生徒を対象としたSSHの取組（課題研究、研究発表、コンテストへの応募等）を更に充実・発展させ、グラデュエーション・ポリシーに沿った生徒の育成を図っていきたい。
進路実現	2 自分を信じて、粘り強く前に進む力を育成する	進路目標の実現に向けて努力を続ける生徒の育成 A：100～80% B：79～60% C：59～50% D：49～40% E：39%以下	B	課題研究の取組を志望理由書や面接に生かして、早期入試に合格する生徒が多かった。このように早期に進路実現した生徒の学習に向かう姿勢を維持するために、早期進路決定者にも共通テストの受験を促し、今年度は合計226名の生徒が共通テストを受験した。一般入試で自己の進路実現を目指している生徒に関しては、多くの生徒が2月以降も補習等に出席し、地道に努力を継続して国公立大学の前期試験に臨んだ。	私立大学では総合型や学校推薦型選抜入試での合格者が、全体の半分近くを占める大学が増加している。私立大学ほどではないが、国公立大学に関してもその割合は増加傾向にある。このような状況の中では、個々の生徒の適性を見極めた進路指導がますます重要になってくる。面接週間等を活用して個々の進路実現に向けて短期的、長期的目標設定を行いサポートしていく体制の強化と、教職員の指導力向上が必要である。
		国公立大学、関関同立・MARCH等の有名私立大学合格者数130名以上 A：130名以上 B：129～120名 C：119～110名 D：109～100名 E：99名以下	A	国公立大学の総合型、学校推薦型選抜入試による合格者は、昨年と同様であった。MARCH等の東京の有名私立大学への進学を希望する生徒は昨年同様少なかったが、関関同立の合格者は昨年度より増加した。国公立大学、有名私立大学の合格者数130名以上という数値目標に関しては、前期試験の結果の段階で、国公立大学101名、有名私立大学32名、合計133名で数値目標を達成することができた。	総合型選抜入試や学校推薦型選抜入試に関しては、志望理由書の作成、小論文の指導、面接の指導と多岐にわたるが、教科指導も含め、教員全体の指導力の向上につながる取組をする必要がある。
		旧帝大・早慶等の難関大学及び医学部医学科合格者数10名以上 A：10名以上 B：9～8名 C：7～6名 D：5～4名 E：3名以下	D	医学部医学科に1名の生徒が挑戦したが合格できなかった。既卒生1名が再挑戦し合格した。 共通テストが難化したため、東京大学や京都大学を目指していた生徒も、大阪大学へと出願先を変えた。難関大学合格者数は、前期の段階で大阪大学4名であった。難関大学を目指す上位層の生徒へのサポートの在り方については、改善すべき点を明確にし、次年度へ生かしていきたい。	1、2年生の難関大学を志望する生徒を対象に、本年度の難関大学合格者や現在難関大で学んでいる卒業生との座談会を設けるなど、生徒の関心や意欲が高まる機会を設ける。 難関大学志望生徒に対して、個別指導の充実を図るためにも、個々の教員が教科指導力向上のために、自己研鑽する必要がある。
		就職内定率100% A：100% B：99～90% C：89～80% D：79～70% E：69%以下	A	就職希望者15名中、15名が希望する就職先に就職できた。（企業12名、公務員3名）	生徒と企業の間にもスマッチが起こらないよう、今以上に様々な機会を捉え、生徒の就職活動を充実させていく。
資格取得		卒業時に全商3種目1級取得者20名以上 A：20名以上 B：18名以上 C：16名以上 D：14名以上 E：10名以下	A	今年度の3年生の全商3種目1級取得者は22名であり、全商全種目1級（9種目）に1名が合格した。また、日商簿記2級に3年生2名が合格した。	家庭での学習時間を現状より1時間以上確保することで、目標を達成できる。 部活動と勉強の両立を図る。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
課題研究	3 課題を発見し、科学的に考察する力を育成する	課題研究に主体的に取り組む生徒の育成 A：100～80％ B：79～60％ C：59～50％ D：49～40％ E：39％以下	A	生徒の自己評価で、97％の生徒が肯定的な評価になっている。	課題研究の内容の更なる向上に向けた指導やアドバイスをすることにより、生徒の意欲を高める。
		課題研究を通じた生徒の研究スキル向上 A：100～80％ B：79～60％ C：59～50％ D：49～40％ E：39％以下	B	学期ごとに活動のルーブリック評価を行っている。このうち、「科学的に探究する力」の達成度は3学年3観点の平均評価が77％であった。	課題研究について、生徒の研究スキルが向上する指導方法の研究に努めるとともに、教員間で共有する体制を整える。
		課題研究 各種コンテスト応募数100以上 A：100以上 B：99～90 C：89～80 D：79～70 E：69以下	A	自然科学系 81本 社会科学系156本 計 237本	コンテストの応募環境が整ってきたことから、応募数が増え、作品の質も向上している。今後、更なる研究内容の向上を目指し、作品の質をより高める。
		課題研究 各種コンテスト入賞数30以上 A：30以上 B：29～20 C：19～10 D：9～5 E：4以下	A	自然科学系25本 社会科学系10本 計 35本 知の甲子園Q-1 2025年大会特別探究賞 愛媛県高等学校総合文化祭自然科学部門 優秀賞、奨励賞 とくしま高校生エシカルサミットベストパフォーマンス賞、ナイスアイデア賞 他	大学等と連携することで、教員の課題研究の指導スキルの向上に努めるとともに、生徒の課題研究の質の向上を図る。入賞も全国規模の大きい大会の入賞を目指す。
授業改善		分かりやすく力が付く授業の実践 A：100～80％ B：79～60％ C：59～50％ D：49～40％ E：39％以下	A	教員が授業改善に取り組んだ結果、学校評価アンケートでは、授業が分かりやすいと感じている生徒が90％、授業で力が付くと感じている生徒が91％であり、昨年度に引き続いて90％を上回った。	校内の研究授業や授業相互参観を通して、授業改善に関する情報交換及び情報共有を図る。また、学校訪問研修や進学指導研究推進プログラム等を活用し、他校での研修にも積極的に参加する。
		ICTを活用した授業の実践 A：100～80％ B：79～60％ C：59～50％ D：49～40％ E：39％以下	A	生徒用に一人一台Windows端末が割り当てられていることを利用し、Microsoft Teamsを用いた課題配信や学習資料の共有をスムーズに行うことができている。また、学年集会やSSHに関わる研究発表会などをオンライン形式で実施することで、場所や時間、感染症の流行などの制約を受けにくい運営が可能となっている。生徒は、これらICTを通じて多様な発表形式や新しいコミュニケーションの在り方を経験しているようである。	次年度からは Microsoft 365 Education A3 プランの導入と、より高性能な生徒用端末の導入が計画されており、今年度よりも充実したICT環境が整備される見通しである。特に、デスクトップ版のOfficeソフトはブラウザ版に比べて機能が豊富であり、文書作成・データ分析・プレゼンテーション作成の幅が大きく広がるため、これらをどの教科のどの単元で活用するのかを検討するとともに、教員が新しい環境に迅速に対応できるよう、校内研修の充実や成功事例の共有が求められる。
読書		夢中になれる本との出会いを導く図書館教育 A：100～80％ B：79～60％ C：59～50％ D：49～40％ E：39％以下	C	達成率は、1年生60.1％(昨年度44.0)、2年生48.0％(同42.0)、3年生56.3％(同49.8)、学校全体55.1％(同45.5)であった。	各学年とも、昨年度より上昇しているが、十分な成果があるとは言い難い。「図書館だより」や「学校だより」等で啓発していきたい。 学校評価アンケートの「読書指導の充実に取り組んでいる」で「よくできている」という回答が他項目に比べて低いため、朝読書や読書会等の実施について、検討していきたい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
表現力	4 他者と協働し、新しい価値を創る力を育成する	生徒のコミュニケーション能力やプレゼン力の向上 A：100～80% B：79～60% C：59～50% D：49～40% E：39%以下	A	学期ごとに活動のルーブリック評価を行っている。このうち、「他者と協働する力」の達成度は3学年2観点の平均評価が85%であった。	課題研究発表会やSSH事業を通じて、プレゼン力や質疑応答力の向上を図る教育活動を展開する。
		課題研究発表及び体験発表者数100名以上 A：100名以上 B：99～90名 C：89～80名 D：79～70名 E：69名以下	A	課題研究の発表において、全生徒が発表を行った。また、校外の様々な発表会にも参加し、発表の機会が増えている。	大会やコンクールを精選し、効率よく効果的な活動を目指していきたい。
創造力		生徒によるイベント企画件数10件以上 A：10件以上 B：9～8件 C：7～6件 D：5～4件 E：3件以下	A	生徒会によるイベント企画、商業科輝安KOU房による市之川鉱山の日ほか、SSH関連での企業とのコラボ企画をはじめ、色々なアイデアが生まれ、形になるよう生徒は意欲的に取り組めている。	色々なアイデアを持っている生徒が多い。今後も、色々なアイデアを生み出させる学校の雰囲気や、「やりたい」を形にできる協力体制など、生徒が生き生きと活動できる学校となるよう努めたい。
地域貢献		地域に貢献する活動に積極的に取り組む生徒の育成 A：100～80% B：79～60% C：59～50% D：49～40% E：39%以下	A	有法子やSSHでの西条市や地元企業との連携、文化部を中心とした各種地域イベントへの賛助出演等、既に地域に貢献する活動を行っており、積極的に取り組む生徒の育成は、十分に行われている。	左記の内容は、西条高校の特徴でもあり、また、良さでもある。今後もしっかりと継続していきたい。
		地域と連携したボランティア活動参加者数200名以上 A：200名以上 B：199～140名 C：139～120名 D：119～100名 E：99名以下	A	特活課で対応しているヤングボランティア登録数が206名、SSHで対応している科学博物館でのボランティア参加者が延べ25名、JRC部の方で実施されたものによる参加者が延べ20名で、かろうじて100名を超えた程度の昨年度よりも大幅に参加者数が増えた。	勉強や部活動などの学校活動に多くの時間を割いていることもあって、ボランティア活動に興味があっても参加できないという生徒もまだまだ多いと思われるので、声掛けを丁寧にし、参加者数を増やしたい。
部活動		県総体出場者数200名以上 A：200名以上 B：199～140名 C：139～120名 D：119～100名 E：99名以下	B	今年度の上場者数は、199名であった。最大目標である200名にはあと一歩ではあったが、昨年度の上場者数が196名であり、県総体出場者数の維持ができていた点で、生徒の頑張りが感じられる。	少子化が進んで部員の確保の難しい時代であるが、西条高校の運動部は、ほとんどの部が人数的に充実しており、練習にもよく励んでいるので、今後の結果に結びついてほしい。
	県高文祭出場者数100名以上 A：100名以上 B：99～40名 C：39～20名 D：19～10名 E：9名以下	A	119名の上場であった。これは、公立学校において松山南高校、松山東高校に次ぐ3番目に多い出場者数である。特に、自然科学部門における参加者数がトップである。	ここにもSSHの成果が見られ、運動部・文化部ともによく頑張っているといえるので、継続していきたい。	
情報発信	5 学校の情報を積極的に発信する	学校の魅力を積極的に伝えるホームページ・Instagramの更新	A	教職員が協力して情報発信に取り組み、学校ホームページの更新回数は260回、公式Instagramでは190件を超える投稿を行い、フォロワー数は3,000人を超えることとなった。学校行事や日常の教育活動、生徒の活躍を継続的に発信することで、保護者や地域、受験を希望する中学生など幅広い層に本校の様子を伝えることができ、情報発信の充実という目標は十分に達成された。	ホームページと公式Instagramによる情報発信は、開かれた学校づくりを進める上で重要な役割を果たしている。 次年度も引き続き計画的な更新を行うとともに、内容や見せ方を工夫し、より分かりやすく魅力的な情報発信に努めていきたい。
業務改善	6 職場環境の整備を行い、やりがいを感じて働ける環境を目指す	教職員が働きがいを感じるとともに、働きやすい職場づくりや多様な働き方を推進する。	C	休暇を取りやすい雰囲気づくりに努めたほか、時間外勤務の削減に向けて業務の見直しや効率化を図った。また、教職員テレワークの利用促進を図り、多様な働き方を推進することでワークライフバランスの向上を図った。	「ノー残業デー」の充実を図るとともに、教職員一人一人のワークライフバランスを意識した職場環境づくりを目指す。また、教職員の働きがい・やりがいを大切にし、疲労感や心理的負担の軽減に努める。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。